



損益分岐点分析ノート

1. 損益分岐点(BEP)とは?

損益分岐点(Break Even Point)とは、損益がゼロとなるような売上高（収益）または売上数量のこと。つまり「売上高＝費用」または「売上高－費用＝ゼロ」となる採算点の売上金額または売上量のことである。

売上高が採算点を超えると（つまり損益分岐点を超えたとき）、利益が出る。逆に売上が損益分岐点を下回ると、損失が出る。後述するように、損益分岐点の売上高を知るためにには、まず費用を変動費と固定費に分類する必要がある。

損益分岐点分析は、予算や利益計画、リストラクチャリング計画など、計画作り(Planning)の場面で良く使われる。それは次の理由からである。

第一の理由は、計画思考と適合する長所があるからである。損益分岐点分析では売上と利益が比例して算出されるので、より計画思考になじむといわれている。外部報告目的の財務会計では、在庫が大きく変動すると、売上が増加しても会計上の利益は減るという現象が起こりうる。

しかし損益分岐点分析では、在庫金額を変動費だけで計算する。売上の増減につれて変動する変動費だけで在庫を計算すると、売上と利益は比例する。

図表<1>で、そのことを説明しよう。

売上が第一年度から 240→240→280 百万円と上昇している。しかし上の表に示した財務会計では粗利(売上総利益)が逆に、120→100→50 と減少していることがわかる。売上と利益が相反するのは、固定費のせいである。

当期製造原価の部分を見ると、製造した個数が 100→50→40 個と減少している。常識で考えても分かることだが、一年間の工場の生産ロットを少なくすると、一個あたりの製造原価は大きくなる。逆に工場をフル回転させて、生産ロットを上げると一個あたりの製造原価は急激に下降する。工場を大方遊ばせると、一個あたりの固定費が高くなつて、製造原価が大きくなってしまう。

財務会計のルールによれば、製品の単位原価をはじくのに、全部のコスト(全部原価)で計算することになっている。したがって操業度の大小によって、売上が増えているのに利益が減るという現象が起きるのである。